日本建築学会九州支部研究報告
第 51 号　2012 年 3 月

韓国忠州市で開催された国際ワークショップでの差異の受容過程とその成果の検証

- その３　「九州組」学生へのアンケート調査にみるワークショップ参加意義 -

正会員　○加藤 浩司 *1　準会員　江藤 紅音 *2　正会員　辻原 万規彦 *3

７．都市計画 - ９．教育と資格　　都市計画
ワークショップ，協働，コミュニケーション，熊本県立大学，有明高専

１．はじめに

「その３」では，ワークショップ（以下，WS）終了後に「九州組」学生から回答を得たアンケート調査の結果報告を通じて，準備を含めた WS における「九州組」の取り組みを振り返る。そして，調査の結果から，学生にとっての国際 WS 参加意義と課題を検討することが本報の目的である。ここで「九州組」とは，熊本県立大学と有明工業高等専門学校（以下，有明高専）関係者の WS 参加者のことを言い，その詳細は第３章に詳しい。

なお，今回のアンケート調査は，WS 直後に行った調査であることを，予めここに記しておきたい。

２．アンケート調査の概要

アンケート調査は，いずれも電子メールを通じて，帰国直後の８月 22 日に「九州組」学生 10 名へ配布し，９月４日までに回収した。質問項目は**表１**の通りである。回答方法は全て記述式で，回答に際しては箇条書きで記述するよう学生に依頼した。第４章にまとめる調査結果は，それをベースとして意味のまとまりを改めて確認し，回答の整理を行ったものである。

３．「九州組」のメンバー構成と準備

「九州組」は，学生 10 名に筆者１・筆者３の教員２名を加えた計 12 名であり，学生メンバーの内訳は，熊本県立大学地域環境調整工学研究室から７名（博士前期課程１年１名，学部４年６名），有明高専専攻科都市計画研究室から１名（専攻科１年），熊本大学建築学科と山口大学感性デザイン工学科から各１名（学部３年）であった。このうち後者２名は，「その１」の通り，有明高専から各大学に編入した学生である※1。

学生メンバーには，それを専攻する学生が１名はいたものの，都市計画・まちづくりに関する研究・実践経験が豊富と言える学生はいなかった。こうした「九州組」における WS に向けた準備は，2011 年５月より進め合同のゼミを計３回行った。詳しくは，**表２**の通りである。このうち，「土橋市場・商店街 WS」とは，八女市・土橋市場をフィールドとして行った WS の予行演習である。当日は，全行程で２時間程度という短い時間ではあったが，２チームに分かれた学生は，それぞれ土橋市場の特徴を抽出するべくまち歩きを行い，その成果をマップにまとめて発表した（**写真１・２**）。

４．アンケート調査の結果

（１）参加の理由【Q.2】

参加した学生はすべて，自らの判断で WS に参加した。しかし，全員が建築・都市計画に関する見識を深めるためや自己の成長のためなど，積極的な理由を持って WS に臨んだかと言えばそうではない。研究室メンバーで韓

表１　質問項目一覧

グループ	質問番号と質問項目
WS 参加に際して	**Q.2** WS に参加した理由　**Q.3** WS への期待（やりたいと思っていたことなど）　**Q.4** WS への不安
チーム作業	**Q.5** チーム作業に臨む姿勢　**Q.6** 韓国人学生とのコミュニケーションのとり方（手段）　**Q.7** 韓国人学生とのコミュニケーション充実度評価　**Q.8** チームメンバーとのコミュニケーション充実度評価　**Q.9** 通用すると感じたスキル　**Q.10** 不足していると感じたこと　**Q.11** さらに良い提案にするために必要だったと思うこと
WS 準備	**Q.12**「九州組」準備で役に立ったこと　**Q.13**「九州組」準備での不足　**Q.14**「九州組」以外での準備の不足
全般（準備～ WS）	**Q.1** WS に参加したことの意義　**Q.15** WS での成長　**Q.16** WS で見えた課題　**Q.17** 感想

表２　「九州組」の準備（合同ゼミの内容）

実施月日・場所		合同ゼミの内容
1	５月 30 日 熊本県立大学	**1.** 自己紹介　**2.** 千葉大学の国際 WS 事例（DVD） **3.** 忠州市の概要とマウル・マンダルギ（学生発表）　他
2	７月 10 日 八女市	**1.** 土橋市場・商店街 WS **2.** 大牟田商店街活性化策（屋外空間）の提案（学生発表） **3.** 津屋崎千軒における「新しいまちづくり」（学生発表） **4.** 屋外空間のアクティビティ（加藤） **5.** 韓国語講座（学生）　他
3	８月８日 熊本県立大学	**1.** 身近な商店街の現地踏査･資料収集成果（各学生発表） **2.** 各チームの準備状況（共有）　他

写真１　八女市・土橋市場

写真２　土橋市場・商店街 WS

Result Verification of the Participation in the International Workshop with Acceptance of Various Differences
-(Part 3) The Significance of Participation in the International Workshop Based on a Questionnaire for Students of “Kyushu-Gumi”-

KATO Koji, ETO Akane, and TSUJIHARA Makihiko

国に行くことに魅力を感じ，参加した学生もいたからである（４名／うち２名は他の理由もあり）。一方，積極的な姿勢が明確に伺えるもののうち，多かった意見は，「国外でのWSという経験したことがないことに興味」など，新たなことに挑戦してみたいという意見（３名）や，「他大学の人がどのようなことを勉強しているのか知りたかった」「異なる価値観や考え方に触れ，視野を広げたかった」など，学外（海外）の人との交流を通じて知識・技術の習得や視野の拡大を図りたい（４名）であった。なお，「九州組」学生のうち７名が初渡航だった。

（２）期待と不安【Q.3, Q4】

Q.2とは違い，期待（やりたい，身につけたいこと）は，全員が持ってWSに臨んだ。ここで多かった回答は，コミュニケーション能力を身につけたい（６名）である。中でも，「自分の意見を発言できるようになる」「忠州大や千葉大の人たちに負けないように，自分の意見を発表・表現する」など，他者とのコミュニケーションが積極的に図れるようになることを明確に目標として掲げる学生が４名いたことは興味深い。この他，Q.2にも関連し，他校の学生が持っている知識や技術の習得（４名）や英語力向上（２名）という意見もあった。

一方，不安については，コミュニケーションに対する不安が全員から述べられた。それは，“言葉の壁”に関する不安ももちろんあったが，チームでのコミュニケーション，そのものが円滑に図れるかを不安視する回答も数多く見られた。このうち後者では，その理由として，「千葉大学や忠州大学の方々は年上」「まちづくりについての知識がなく，WS慣れもしていない」など，年齢やキャリアの違いを記す学生が３名いた。

（３）姿勢【Q.5 表３・4】

ここでの回答の特徴として，コミュニケーションを積極的に図ることを，メンバー全員が挙げていた。具体的には，積極的に発言・会話をすることや，わからないことは積極的に質問することを含めて，他者の意見の理解に努めることを心掛けていたようである。

（４）韓国人学生とのコミュニケーション【Q.6, Q.7 表3･4】

韓国人学生とのコミュニケーションは，概ね英語にジェスチャーを付して行っていたようであり，加えて，スケッチが両者のコミュニケーションを支えた様子も垣間見られた。また，わからない単語などの検索には辞書（電子辞書含む）を主に用い，辞書にあわせて，ウェブ上の翻訳サイトを使ったという意見も見られた※2。

表３　学生１～５の回答【回答者別】（抜粋・一部要約）

	学生１	学生２	学生３	学生４	学生５
Q.1	とても有意義。都市計画の勉強になったこと，視野が広くなったことが一番の収穫。普段は違う環境で勉強をする者同士が，意見を出し合う面白さなど，WSに参加したからこそ感じられたこと。	とても有意義。他校の学生とのWSが初めての経験。全てが新鮮で刺激的。自分よりもレベルの高いところで作業をしたことで，自分に必要なものが何となく見えてきたことも大きな成果。	有意義。学んできた環境が違う人たちとの共同作業を通して，異なる考え方をたくさん知ることができ，視野が広がった。将来の進路を考える良い機会になった。　他	大変有意義。自分にできないこと，足りないこと。甘えが通じない環境でそれらを痛感でき，このままでは駄目と思えたことが一番の成果。WS準備は，身近な地域に意識を向けるきっかけになった。	すごく有意義。みんな意識と技術が高く，勉強になった。異なる文化を知り，言葉の通じにくい環境で過ごせたことで，コミュニケーションの難しさや，伝わった時の嬉しさをより感じることができた。
Q.5	年下なので知識や技術も一番下。だからこそ，思ったことは遠慮せず発言し，色々教えてもらう。	自分の意見・考えをもって臨む。しっかりと作業についていく。	年下なので，難しいことを考えず積極的に発言。知識などをたくさん吸収したかったので，全員と積極的に会話。	思ったことは発言。疑問に思うことは聞く。日本での常識は韓国ではそうでなく，むしろそれが発言しやすかった。	相手（忠州大）が言っている内容をしっかり理解する。わからないことは直接聞いたり，千葉大生に質問。
Q.6	スケッチ，ボディランゲージ，翻訳ソフト，電子辞書。	英語。辞書や翻訳ソフトを多用。上手に説明できない時は，ジェスチャー。提案を伝えるには，絵を描くのが最も早く，正確に伝えられる。	主な手段は英語による会話と，スケッチやイラスト，身振り振り。特に重要な場面では，加えて翻訳サイト。	最初は主に翻訳ソフト，英語が得意な人に聞く。その後，英語やジェスチャー，雰囲気で。本当にわからない言葉は翻訳ソフト。	簡単な英語，翻訳ソフト。あとは身振り手振り。
Q.7	どちらかと言えば図れた。単語やスケッチ，ボディランゲージで自分の意見を伝え，理解してもらえた。	図れた。伝えようとしていることを，韓国人学生が理解しようとしてくれた。	図れた。片言の英語でも通じた。スケッチでも通じない時は，英語がうまい人のサポートや翻訳ソフトの使用。	初めは苦手意識先行で翻訳ソフトへ。後半，簡単な英語でも伝わることに気づく。簡単ではなかったが，表現を工夫。	今の自分としてはできた。互いにうまい英語ではなかったので，簡単に簡単にと話した。
Q.8	図れた。わからないことは気軽に聞けた。私自身も言葉やスケッチなど，様々な手段で自分の意志を伝えられた。	図れた。話し合いで，しっかりと自分の意見が言えた。他者の意見でわからなかったことや違うと思ったことは，自分の言葉で意見できた。	図れた。周りが積極的に意見を聞いてくれたので発言しやすかった。わからないことは素直に聞くようにしていた。	ある程度，図れた。発言しやすい環境。韓国側が意見を受け入れてくれる感じもあった。そこでもっと意見をぶつけ合えれば良かった。　他	千葉大生やチューターに意見交換よりも，質問ばかりしてしまった。柔軟な発想ができず，自分の意見の発表に躊躇した部分もあった。
Q.15	もっと色々なことを知りたい，体験したい気持ちが強くなった。変な遠慮をせず，自分の意見を言えるようになった。	コミュニケーションが思いの外とれたので，その点は大きな自信に。言葉が通じない相手に対する提案の仕方。	自分の考えを頭で整理し，言葉を選んで伝える努力をするようになった。その時に，スケッチを描くようにもなった。	色々なことをやってみようという気持ちが強くなった。疑問などを人に教えてと言えるようになった。以前よりも自分を表現できる，物怖じせずに行動的に動けると思う。	コミュニケーションがとりにくい場面でも，何とか伝えようとするようになり，精神的にも大きくなった気がする。
Q.16	自分の考えを伝えるための語彙力，英語力。自分の考えをカタチとして表現するためのスケッチ，PC技術。	自分の考えを説明するために，事例を知る。PC技術。	英語力。自分の言いたいことを伝えられるスケッチやパースが描けるようになる。自分の意見をきちんと相手に説明できるようになる。	もっと勉強する，実践する，経験すること。身につけたいことは沢山。英語力，コミュニケーション能力，PC技術，様々な手法や考え方など。	積極的に行く。色々な角度から物事を見る。まだ勉強しなくていけないことばかりで，見ておくべき建物がたくさんあることにも気づいた。

こうした手段を用いて重ねられた韓国人学生とのコミュニケーションについて，Q.7では，「どちらかと言えば図れた」を含め８名がポジティブな意見を述べた。また，こうした判断をできる要因については，コミュニケーションに向き合った自らの姿勢・行動を挙げる回答が多い中，韓国人学生の姿勢・行動や両者の関係性に言及する回答もあった。一方，ネガティブな見解を見せる学生も２名いた。うち１名は，日韓別にチームの話し合いが進められていたことを，その理由として挙げた。

（5）チームでのコミュニケーション【Q.8 表３・4】

ここでは８名からポジティブな意見が聞かれた。また，そう感じられる理由として，わからないことは質問することができたこと，周りに受容の姿勢があったことを挙げる回答が多かった。なお，今回の調査では，日本人同士で用いた言語の種類は確認できていない。

（6）「九州組」の準備【Q.12，Q.13】

Q.12では，事前に収集した商店街や市場の資料が役に立ったという声が７名から挙げられた。この中には，現地踏査での経験そのものを挙げる意見もあり，これら７名の他からも，同様に「土橋市場・商店街WS」での経験が有意義であったという意見が述べられた（１名）。

Q.13では，４名が「特になし」と答えたが，他方，「持っていった市場等の資料を，今回のテーマとリンクさせておくこと」など，事前に収集した資料の内容をより深く理解しておくことの必要性を指摘する（２名）意見もあった。また，ここにWSに関する情報収集が不足していたことを挙げる意見も１名から挙げられていたが，これについては，Q.14の回答として，同様の内容を指摘する回答が２名から述べられた。

（7）WSに参加したことの意義【Q.1 表３・4】

表３・４より，WSへの参加は，メンバー全員にとって有意義な経験になったことがわかる。とりわけ，これまでの学習環境やキャリアだけでなく，文化や生活環境まで含めて，あらゆる点で差違を持つメンバーとの出会いや協働作業が，多くの学生に何らかの成果をもたらしたようだ。その中では，こうした経験が視野の拡大や自身の課題発見，さらには，仲間づくりにつながったことを評価する声が多かった。

（8）成長したと思えること【Q.15 表３・4】

メンバー全員が，WSを通じて自身の成長を感じ取っ

表４　学生６～10の回答【回答者別】（抜粋・一部要約）

	学生６	学生７	学生８	学生９	学生10
Q.1	有意義。様々な人と出会い，深い交流ができた。様々な人と話すことで色々な価値観を知れた。日韓の文化の違いを感じることができた。プレゼンテーションの方法や作品の魅せ方を学べた。	有意義。まちづくり，都市計画に興味を持てた。環境が違う人たちの意見が色々聞けた。その場でしかわからない情報をたくさん知れた。自分の考えを人に伝えることの難しさと面白さを実感できた。	仲間ができた，夢を持つことができたことが一番の収穫。言葉の壁がありながらも，建築を通して自分の意見や相手の考え方を知ることができ，貴重な経験になった。韓国文化にもたくさん触れられた。	有意義。日韓混合チームのWSには，いつものWSにはないやりにくさなどがあったが，終わってみたら全てが有意義。WS以外では，海外に出たこと。行かず嫌いにならなかったことは良かった。	とても有意義。WSに参加しなければ出会わなかった人たちと仲良くなれた。様々な文化を学ぶことができた。
Q.5	チューターとメンバーの間で意見が食い違うことがあったので，雰囲気が悪くならないよう努めた。	小さな気づきなどでもメンバーやリーダーに話す（リーダーが全員の意見を聞く環境を大切にしていた）。わからないことなどは質問。	できる限り積極的に。少しでも自分の意見が役に立てば。今までやったこと（WSなど）を紹介してイメージ提案。	最初はついていくことで精一杯かと思っていたが，英語ができない中でも，内容の理解に努め，自分の意見も言った。	話し合いで，自分の考えを積極的に出す（なかなか上手くいかなかった）。
Q.6	日本側に一人，韓国語も英語も上手な人がいた。その人を中心に英語やジェスチャーで。難しい内容は翻訳サイト。	英語，表情，スケッチ，写真（事例），ジェスチャー。	英語と，とにかくジェスチャー，絵を描くこと。	主に英語。たまに日韓辞書を使って単語を伝える。スケッチも交えることで，自分の意見を明確に伝えられた。	簡単な英語とジェスチャー。たまに日本語。
Q.7	どちらかと言えば図れなかった。チーム内の話し合いの時間が少なく，話し合いそのものも日韓別。	図れた。互いに色々な方法で意見を伝えようとしていた。みんなが向き合って話し，理解できたこと，できないことを率直に表現。異なる意見にも興味を持ってくれた。	図れた。自分の意見を相手に伝える手段は言葉だけでないことを感じた。片言でも相手が感じ取ってくれた。伝えることを諦めなければ通じた。	図れた。初日は全くできなかった。もともとコミュニケーションをとるのが好き。日を追うごとに慣れ，言葉で伝えられなくても気持ちで通じるようになった。	あまり図れなかった。英語力不足。想像以上に言葉の壁は高かった。話し合いでは難しい単語も飛び交っていたので，理解するので精一杯。発信することができなかった。
Q.8	どちらかと言えば図れた。各人が考える提案が似たイメージだった。事前学習などで，意見を言うことやまとめることに慣れていた。	図れた。チームの雰囲気がとても良かった（話しやすかった）。	図れた。班で良かったことは，各人の意見を聞くこと。異なる意見を否定せず，素直に受け止め，チーム全体の考えに落とし込んでいた。	図れた。千葉大生が年上だったので，最初は遠慮。その後，自分の意見をまず話しやすかったメンバーに伝え，賛同を得て全体の意見へ。	十分ではないが図れた。ほとんど私は日本語しか喋っていなかったが，周りの優しさに救われた。話し合い以外では，簡単な英語とジェスチャー。
Q.15	コミュニケーションの幅が広まった。また価値観が広くなった。以前よりも気持ちが外向きになった。	どうにかして伝えたいと思うようになった（少しは積極的に慣れた）。	建築に対して，もっと向き合いたいと思うようになった。夢を持つ人が多く，自分自身も夢を持って生きようと決心。刺激が多いWSだった。	海外に出ることに対する恐怖心を克服できた。言葉の壁があっても気持ちは通じ合えることを知った。コミュニケーション力に少し自信を持った。	最初は緊張したが，人見知り克服！連日，睡眠不足だったが，集中力・忍耐力がついた（迷惑をかけないように，と思っていたからかもしれない）。
Q.16	今更だが，建築的な力が伴っていないと実感し反省。英語力をもっと身につけたい。	自分の知識を少なさを実感。もっと勉強したい。もっと外に出て色々経験してみたい。	夢を持つこと。夢を叶えるために今自分が何をしなければいけないかを考える。	待っていては何も始まらない。やってみることで，できるかできないかはわかる。食わず嫌いでは成長できないことを学んだ。	PC技術を磨きたい。国内はもちろん，もっと世界へ飛び出して様々なものを見たい。英語をもっと勉強する。様々な建築関係の本を読みたい。

ていた。前述の通り，Q.4では，コミュニケーションに対する不安が全員から聞かれていたが，ここではコミュニケーション能力の向上に関する回答が最も多く寄せられた。中でも，コミュニケーションに積極的に臨めるようになったことを成果に挙げる意見が多かった。これらの他，WSの経験を通じて，物事に対する好奇心や積極性が出てきたという意見もあった。

（9）各自の課題【Q.16，Q.10表3・4】

メンバー全員が，WSを通じて課題を見出すことができた。最も多かった回答は，英語力を向上させたいや，プレゼンテーションスキル（特に，アプリケーション操作技術）を身につけたいというものであり，ここでこうした意見を述べた学生は概ね，Q.10でも同様のことを回答している。また，この他，建築学に関する知識や技術を身につけたいという意見も挙げられていた。

5．おわりに

様々な「違い」を経験した今回のWSであるが，「九州組」学生がそこで得た「もの」は何だったのか。アンケート調査の結果を見る限り，学生は，何らかの「もの」を持ち帰ってきたことは間違いないだろう。

では，「もの」は何か。回答を総合して，その中から多くの学生に共通する事項を読み取れば，①“言葉の壁”や年齢・キャリアの違いがある中でも，コミュニケーションをはかっていける力の獲得，②視野の拡大，③目的意識の明確化やそれに対する課題の発見，③国内・国外のネットワーク（仲間）の獲得※3，④建築や都市計画に対する興味の高まりが，WSに参加して得られたこととして挙げられる。

その中でも，それぞれに差違はあるだろうが，WSの期間中に上記①についての自信が出てきたことが，他の成果獲得につながったと本研究では考える。さらに言えば，その自信は，コミュニケーションに不安を抱いていた学生たちが，紆余曲折はあっただろうが，コミュニケーションに臨む積極的姿勢（相手に何とか自分の意見などを伝えようとする意志・行動，相手の意見など何とか理解しようとする意識・行動）を持ち続けられたことが大きな要因の一つとなり，芽生え育ったものではないかと見る。実際，回答には，特に“言葉の壁”を理由として，メンバーとのコミュニケーションを諦めたという意見はなく，むしろそこからは，スケッチやジェスチャーを交えてコミュニケーションをはかっている様子や，自分の意見を発言しわからないことは質問する様子が窺えた。こうした学生の姿は，筆者1・筆者3が各チームをまわる中でも確認できたことであり，期間中は，学校単位や「九州組」という単位でまとまり閉じこもってしまう学生の姿も見られなかった。それだけ，チームはもちろん，自分の学校以外のメンバーとの交流に積極的であったということだろう。

では，「九州組」学生のこうした積極性が育まれたのはなぜか。今回のWSが“言葉の壁”をはじめとする様々な「違い」がある中で行われたWSであったこと，学生の周りに受容の姿勢やより良い提案をしたいという姿勢があったことが，その要因として挙げられよう。加えて，「九州組」準備も，その一助になったと言える。その中で収集した商店街・市場の写真データなどは，学生の発言や理解をサポートし，「土橋市場・商店街WS」や現地踏査の経験は，慣れないWS作業についていくうえで役立っていたからである。ここに，WS経験や都市計画・まちづくりに関する研究・実践経験が豊富とは言えない学生が，国際WSに参加する場合の準備のあり方のヒントを獲得できる。しかしながら，一方では，WS準備に関して，「持っていった市場等の資料を，今回のテーマとリンクさせておくべき（前出）」「色々なWS事例を調べておけば」「現地でどんな調査をするか，アウトプットはどうするか。事前にできることはやっておく」など，WS期間中の作業に関して，「韓国人の考え方や対象市場の下調べができていれば。住民や利用者の人とも考えられば」「市場は地域住民と密接に関わるもの。住民の意見を聞いてみたかった」などの声も，本文中には掲載できなかったが，今回の調査では寄せられていた。WSの準備・運営という点に注目すれば，これら意見についての検討も必要だろう。

【謝　辞】アンケート調査に協力をしてくれた「九州組」学生メンバー諸氏，そして，ワークショップでお世話になった忠州大学校の皆さま，北原理雄教授と郭東潤助教をはじめとする千葉大学大学院の皆さまに，この場をお借りして深く御礼申し上げます。

【補　注】

※**1**：参加者募集は，千葉大学大学院都市計画系研究室修了生の筆者1が，有明高専専攻科生と有明高専卒業生，さらに筆者3の研究室へ参加を呼びかけた。なお，筆者3研究室の学生は，配属以前から，今回のWSへの参加可能性があることは認識していた。

※**2**：チーム6では，翻訳ソフトを使わないことを徹底。

※**3**：2011年12月現在も，SNSなどを通じた交流を継続。

***1**：有明工業高等専門学校建築学科　准教授・博士（工学）　Assoc. Prof., Ariake National College of Technology, Dr. Eng.
***2**：熊本大学工学部・学部生　Student, Kumamoto University
***3**：熊本県立大学環境共生学部　准教授・博士（工学）　Assoc. Prof., Prefectural University of Kumamoto, Dr. Eng.